
はじまる恋。

栄華

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はじまる恋。

【Nコード】

N1727X

【作者名】

栄華

【あらすじ】

体育祭・バレンタイン・クリスマスetc・・・
いろいろなお話を各話3話程度で、
書こうと思っています。

R15がどこまでなのかよく分からないので、
保険です。

拙いですが頑張って書こうと思っています。

(意見や指摘Welcome!!ですので、
そちらもよろしく願います。)

体育祭ー！！？

パーン

ピストルの音が鳴り響く。

そう、今日は体育祭だ。

私、鈴宮杏は応援席の一番前を陣取って
あの人が来るのを待っている。

黄色い声援が最高潮に達したアンカー。

私は自分のクラスよりも、

黄色いゼッケンに黄色いハチマキのあの人に
釘付けた。

運動神経が良いのもみんな知ってるし、

何よりかつこ良くて優しいあの人は

私にとって高嶺の花なわけで…

だけど私が彼を好きなことは、

なぜか女子の中で有名らしい。

最後のカーブ。

私達の前を通ると声援はもっと大きくなる。

私はただ手を祈るように握って
通り過ぎるのを見送った。

「高峰くんかつこ良かった〜」

「だよねー!!」
と、ちらほら声をする。

「高峰くんかつこ良かったね。」
次は隣の陽子が同じ言葉を私になげる。

「うん… かつこ良かった…」

体育祭は好き。

かつこ良い高峰くんを誰も怪しむことなく、
茶化すこともなく見れるから。

でも、なんだか芸能人のように
凄い遠い人のような錯覚がするから。
嫌いかもしれない。

見事高峰くんのクラスは高峰くんのおかげで
逆転一位になった。

高峰くんは嬉しそうに笑って
友達に抱きつかれて喜びあっている。
遠いけれどよく分かる。

私は彼の笑顔が好きだ。
笑ってくれるだけで嬉しくなる。
と言っても去年が一緒なだけで、
あまり話したことないけれど…。

~~~~~\*~

あれから私もリレーが終わって  
次は借り物競争が始まった。

私達はもう出る種目は終わって  
フリータイム。

陽子とたわいもない話で盛り上がって  
ケラケラ笑っていると。

「ごめん、鈴宮借りてもいい??」  
という声がある。

振り返った瞬間もう腕を捕まれている。

「…え??」

驚いて捕まれた腕から視線を上げていくと…

後ろ姿でも分かる。

…高峰くんが私を引っ張っていた。

体育祭――！！？

あまりの衝撃に言葉も出ないまま、  
連れてこられたのは朝礼台前。

いきなり腕を掴んでいた手が、  
私の手を複雑に絡めて…俗に言う恋人繋ぎに変わった。

「え…」

「お題は??」

と、高峰くんが進行係の人にマイクを向けられた。  
手を目を見開いて凝視していた私はその絡められた手が上がるまま  
に、

私も目線を上げる。

高峰くんは私の顔を見たまま

「三組高峰瞭と二組鈴宮杏です。お題は、

”彼女”です。」と言った。

女の子の悲鳴にも似た叫び声と、

男の子の冷やかしの声も私には聞こえなかった。

…私と高峰くんだけの世界みたいに

私にはほほ笑む高峰くんしか見えなかった。

「証明してください!!」

「うわっ。手をつなぐだけじゃダメ?？」

「ダメです。もうちょっと頑張って下さい」

横顔から正面になった高峰くんが、  
近づいてきて反射的に俯いた私にキスをした。

…と、見えるように顔を近づけて、

「目瞑って」と小声で言う高峰くんの言葉通り  
恥ずかしくって目をギュッとじた。

離れて行く気配でそっと目を開ける。

「長かったですね〜。(笑)

はいっ。ありがとございました〜。」

そういつてまた引つ張られたまま、  
一位の座る位置に座ると、

「ごめん。今日は口裏合わせて。」

と、小声で言ってきた。

やっと意識が回復した私は「高峰くん彼女他校だったっけ?？」と、  
彼女が居るという噂があったから  
聞くと。

「え???彼女?!居ないよ。」



「え?! 凄い噂になってるよ?? 雅之とかが高峰くんがずっと想ってる人が居るって言うてたし。」

「…彼女は居ないよ。」

「それにしたつてもっと可愛い子連れてきたら良かったのに!!」

「え??」

「だって私がたまたま目に入っただから連れて来たんでしょ??」

何も聞きたくなくて、

「なんかごめんね!!」

と、笑いとはそうとするのに高峰くんは笑ってくれなかった。

「高峰くん?? 大

大丈夫と続くはずだったのに

「おいっ!! そこイチャイチャすんなよ!!」と、うるさい雅之が隣に座ったから言えなかった。

「は?! イチャついて…ない」

内緒話をしていたせいかピッタリとくっ付いていた。

「ごめん!!」

急いで離れると隣で爆笑する雅之をキッと睨む。

その先に居た駿を見つけて

「?? 雅之のお題何だったの??」と、聞く。

「モノマネが上手いやつ。」  
と、聞いて

「えーっ 駿のモノマネ見たかった!!」

「しかも新作だぜ??」

「えーっ 駿お願いもう一回して!! お願いっ!!」

駿は咳払いをしてちょっと古めの芸人の真似をした。

…私と雅之は大爆笑

「お前ほんと似てるか似てないか微妙だよな!!」

「ほんと!! しかも古っ!!」と二人してヒーヒー言いながら大爆笑。

「その割に笑ってるじゃねーか!!」とふてくされ気味に駿は言う。

あまりに笑い過ぎな私達は注意されて  
只今小声で会談中。

「駿と雅之って勿体無いよね。」

「は?!」「へ??」

「だって雅之は意地悪だし、駿は天然だし。」

「「お前・（杏）には心配されたくない。」」

「え???なんで??」

「だってお前制服のまま寝るしな。」

「確かに」

「なんで部屋はいつてんの?！」

「毎日宿題写してんの。それで俺何回布団掛けてやったか…」  
「俺も…」

目元を押さえて泣き真似する二人を叩く。

「しかも杏パジャマも持っていないで、  
お風呂入ってバスタオル巻いて出てくるし…」

「あつ!!それ俺も見た!!あれは目に毒だよな」  
と、駿も雅之もまた泣き真似をし始めた。

「はあ?!ほんとム力つく!!それなら雅之だって駿だって  
お風呂上がりいつもじゃん!!私が何回着替え持って行かされた  
か…」

私も二人と同じように泣き真似をすると  
そのタイミングで退場の音楽がなり始めて、  
私達は急いで退場門から出て行った。

その後ポロツと言った言葉が雅之と駿の逆鱗に触れたらしく

二人に挟まれて腕を掴まれ連行されている途中。

前を歩いてた高峰くんが女の子に囲まれていた。  
囲まれるのはいつものことなんだけどいつも笑ってる高峰くんが、  
無表情でなんだか怖かった。

「なんで高峰くん怒ってるんだろ??」

私の頭上で意味ありげに目を合わせた  
雅之と駿には気づかなかった。

体育祭――！！？

あっという間に終わった体育祭。

借り物競争の後は混乱した顔の陽子と、  
どういふことか意見を求める女子の大群に囲まれて大変だったけど、  
とりあえず笑ってやり過ごした。

（当事者の私も分かってないの！！）なんていう心の叫びは誰も分かってないだろうから。

「あゝあ。」

そんな私は雅之と駿を待っている。

静まり返った私だけしか居ない教室。

夕日に照らされるグラウンド。

窓側に近寄って景色を見る。

「終わっちゃった。」

私は毎年こうやって外を見てしみじみする。

小学校の頃から運動会は幼なじみの雅之と駿と私の家の三家族で食べにいくのが決まりだった。

それも私が二人のご飯を作るようになってからは、私達三人で行くことに変わったけれど。

下を見るとサッカー部はテントを運んでいる。

（まだ終わりそうにないな。）  
そう思つて席に座る。

ガラガラガラ

「鈴宮??」

扉が開いて入ってきたのは高峰くんだった。

「あれ??陸上部は終わったの??」

「うん。」

「早いね」

「誰か待つてるの??」

「うん。雅之と駿を待つてるんだけど、  
見て。サッカー部全然終わらなさそうだよ。」

「鈴宮つてあの二人と仲良いよね。」

「うん、まあそうだね。幼なじみの上に小学校の入学から  
一度もクラス離れたことがないから。」  
と、笑う。

そう、生まれときからずっと一緒に  
最近は家族よりずっと一緒に居る。そんなことが今更こそばくなつ  
た。

「なんていうか…もう家族！もし両親が死んでも凄い悲しいけど、それよりもつと悲しいくらい大切で必要不可欠。」

「じゃあ…好きなの??」

「まさか！でも、家族としては凄い好き。」

「…そっか。」

なんだか不思議な気がした。

好きな人がこんなにも近くに居るのに、普通に話せることが。

去年は委員と一緒に業務連絡ぐらいしか話せなかったはずなのに。

「…じゃあ、さ。」

…俺のことは??」

「へ??」

昔にタイムスリップしていた私はいきなりの発言に目を見開いた。

「俺はさ…去年からずっと鈴宮が好き。」

強い眼差しで私を見てそう言った。

「だからさ…今日の借り物のとき鈴宮を連れて行った。」

強い眼差しはちつとも反らされることなく、私だけを見てる。

「…ほん…と??」

やつと言えた言葉は弱々しくて情けない言葉だった。けれどそれが合図のように疑問が沸いてきた。

「だって高峰くんは学校のアイドルで、モテるのに??」

「俺って学校のアイドルなの??（笑）」

「うん。だってなんでも出来るから…」

「それは鈴宮の前では格好いい姿で居たいから頑張っただけだよ。…それにモテるって言われてても鈴宮が好きになってくれなかったら、

全然意味ないじゃん。」

「…ほんとにほんと??」

「ほんと。じゃなきゃ、あんな大勢の前で連れて行かない。」

「じゃあ、どうして私なの??」



「どうして…んー。入学式で一目惚れして、話しても見ても楽しかったから。」

もっと好きになった。」

「…」

あまりに意外な発言に恥ずかしさで固まっていると、

「ねえ、あまり焦らされたくないんだけど、  
…返事聞いてもいい??」

「…」

「鈴宮??」

「私も…」

そう呟くのが精一杯だった。

「ほんと?!」

耳まで赤いであろう顔をコクコクとふる。

「じゃあ…付き合ってください。」

「…はい。」

そう言つて上目で高峰くんの顔を見ると、  
綺麗な笑顔で私を見ていた。

「じゃあ、ほんとにしても良いよね。」

「え??」

顔が近づいてきた。

体育祭と同じでうつむいた私の前で高峰くんは止まった。

高峰くんと目が合う。

私はゆっくり瞳を閉じた。

体育祭と違うのは、ほんとに触れたこと。

「瞭」

高峰くんを探す声で私達はゆっくり唇を離す。

「抜け出てきたんだっ」と笑う高峰くんは、

私を見つめてこれで彼女だってみんなに言ってもいいんだよね。と満足そうに言った。

「えっ!! みんなに言っの?!!」とアタフタしてる私の頬にキスをして

「言わなくても顔に出るかも」とちよつと意地悪な顔をして行かなくちゃと言って教室を出て行った。

私の彼は学校のアイドル。  
ずっと周りに居る少女Aだったけど

私を見つけてくれたみたい。  
私の彼は学校のアイドル。  
みんなが羨む学校のアイドル。

## 記憶喪失？

「竜也！！ねえ、竜也！！」

「大丈夫！！体に異常はなかったって先生が仰ってたから。」

「じゃあ、どうして目が覚めないの！！」

暴れまわる私を朋美はしっかりしなさい！！と大声で私を叱った。

「今は由香が側に居てあげないと！！結婚するんでしょ！！

しっかりして、竜也君の側に居てあげて！！」

朋美の説得もあつてか私は大分落ち着いた。

ここは病院。

私の婚約者の野田竜也がバイクで事故に巻き込まれて、意識不明。一命はとりとめたけれど目を覚まさない。

竜也の両親はアメリカに住んでいらっしやるから、私とか竜也の友達しか居ない。

私は竜也の手を握ってただひたすらに祈っていた。

朝がやってきた。

生きているけどまだ目を覚ましそうにない。

2日目。

事故が起きて3日目。

私は3回目の神社を訪れていた。

チャリン

こういう時、何円入れて良いか分からないけど、小銭を入れる。

神様。

私と過ごした日々を忘れても良い。

竜也が私を好きだったことも忘れても良い。

私自体を忘れても良い。

お願いだから目を覚まさせて下さい。

お願い竜也を連れてかないで。

お願い…

ギュツと目を閉じて胸の前でもう一度手に力を入れて強く握る。

そして神社を見つめて竜也の居る病院に向かう。

そんな日々が続いていた。

本当はずっと側に居たいけど、

竜也の友達が私と変わると言って、

無理やり私を家に帰すからそんな生活を送っている。

神社を出てすぐタクシーを拾って病院へ向かう。

くくく

携帯がなった。

ー非通知ー

出たくなかったけれど鳴り止む気配もないので、  
恐る恐る電話に出た。

「…もしもし」

「由香ちゃん?! 竜也意識戻ったよ!!」

「え?!…すぐ行く!!」

そう言った私の目の前には、もう病院が見えていた。

「竜也!!」

「あつ、由香ちゃん!! 良かったね。  
竜也目覚ましたよ。」

「竜也??」

「…」

「竜也??」

「…お前誰??」

「竜也なに言ってるんだよ!!」

「裕也の知り合いか??」

「竜也!! おまつ」  
「いいの」

「由香ちゃん?!」

「ごめん竜也裕也君借りるね。」

私は竜也の友達の裕也君と病室を出る。

「裕也君。もういいの。」

「私ね、さつき願掛けしたの。竜也が目覚ますようにって。私を忘れても良い。私と過ごした日々を忘れても良いって。だからもういいの。」

どうしてこんなにも冷静なのか本当に分からない。ただどなんだか竜也が”目を覚ました。”もう、それだけでいいと思った。

でも！！とまだ裕也君は食い下がってくるけど、私が笑うと納得してないけど分かってくれた。きっと私はちゃんと笑えてない。分かってた。

「裕也君。竜也に私のこと話さないで。」

そう一方的に約束させて私は病室に入ることなくそのまま家へ向かった。

まず、私が先にしたのは竜也の家へ向かって私物を全部持って帰ったこと。

ただ、左手にある婚約指輪は私の引き出しだと貸してくれていた、引き出しにしまった。

竜也は指輪を結婚指輪じゃないからと言ってつけてなかったか大丈夫だ。

作業をしていたら、ふと神社に行こうと思った。  
ちゃんと私の願いを叶えてくれたから。

普段神様なんて信じてもないくせに、  
勝手だよねなんて思って小さく笑った。

悲しくなかった。

ただ、生きてて良かった。

目を覚ましてくれて良かった。

誰か優しい神様か何かが悲しいとか、  
涙とかの神経を麻痺させてくれたみたいだ。



## 記憶喪失？

久しぶりの自分の家はなんだか何かが足りないような、喪失感が漂っていた。

ソファーに座ってみたって、  
テレビを見てたって、  
料理を試みたって。

何か違う。

しかも俺って料理が恐ろしく出来ないみたいだし。  
今作ったのだって”卵がけご飯”だ。  
あまりに料理が思い浮かばないから  
記憶喪失かと思ったぐらいだ。

（一体どうやって生きていたのだろうか…）

自分の家の空き部屋も分からない。  
物置ってわけでもなさそうだし…

最近何かが大事な何かが抜けている気がする。

ふと目に付いた引き出し。  
何時もは開けないし開けてはいけない気までするのに、  
今日は開けたくなった。

ちょっと勢いよく開けた引き出し。

コロン

出てきたのは指輪だった。

「??」

透かして見てみる。

自分の指には入らなさそうだ。

「誰のだ??」

しばらく指輪を眺めて

まあ、いつかと言ってなおした。

これをきっかけにあちこちに人の気配があることが分かった。

料理の本には誰かの字でアドバイスが書いてあるし、  
カレンダーには明日にシルシが付いていた。  
よくよく見ると対になってるお皿にマグカップ。

自分の部屋に行つて引き出しを開ける。

「ほんとに入つてた…」

パツと思い出したのは部屋の引き出しを開け閉めしてやたらと嬉しかったことだった。

綺麗にパッケージされた”ソレ”は  
有名なジュエリーショップの物だった。

十中八九指輪。

レシピに指輪。カレンダーも机に並べようと取りに行く途中、

バサッ

下に置いてあつた箱を蹴った。

「はぁ……」

派手にばらまいた中身をなおそうと思って手に取った本の隙間からはみ出していたものがあつた。

「?!」

どうして忘れてたんだろう。

どうして言ってくれなかったんだろう。

どうして…忘れてたんだろう。

これが怒りなのか悲しみなのか分からない。

これが自分に対する怒りなのか、

他人に対する怒りなのかさえも分からない。

シルシの付いたカレンダー

アドバイスの付いたレシピ

出てきた指輪

ラッピングされた指輪

出てきた写真

空き部屋

喪失感

「なんて馬鹿なんだろう。」

全てに繋がるものは一つしかないのに。

## 記憶喪失？

「殴つてくれ。」

実家に帰る途中。

後ろから腕を引っ張られ、悲鳴をあげる間もない私の上からそう声が降ってきた。

掴まれた手首から視線を上げると竜也が居て、  
すごい怒っているような、

それでいてかなしそうな顔で私を見ていた。

「頼む。」

腕を振り払ってもいい。

顔も見たくないと言ってもいい。

怒鳴ってもいい。

「頼む。俺を拒んでくれ。」

「…どうして??」

「もう俺は婚約者とは言えない。」

「…記憶が戻ったの?!」

「ああ。」

「そうなの。」

「…元氣そうで良かった。  
それに怒ってないよ。」

だって、私が願ったんだから。」

「??？」

「私が忘れてもいい。って神様に願ったの。」

それのおかげか記憶と引き換えに竜也は意識が戻った。  
それで良いと思ったの。」

「…なんて言っても竜也にはわかるんでしょうね。」

竜也は私をよく分かってるから。

こうやって言ってる今も顔を見れない弱い私も。

素直になれない私も。

愛情表現が苦手な私も。

よく知ってるから、私の気持ちなんてすぐ分かってる。

寂しかったなんて言わないように、

寂しいなんて思わないように。

ここ何日も必死に働いて、何も考えないように無理にお酒も飲んだ。

でもね、お酒って肝心なことは忘れさせてくれないから。

肝心な時は酔わせてくれないから。

「…もう思い出さないと思ってたのに、

指輪を置いていったのは、

それでもやっぱり思い出して欲しかったから。

最後に迎えに来てほしかったから。

…ズルいでしょ。

やっぱり竜也も心も欲しかった。

神様をお願いして叶ったけど、

叶って欲しくなかったただなんて思いそうな自分が怖かった。」

「…今までのことを忘れたら、  
もうそれは”俺”じゃないよ。」

竜也はちよつと間をとった後、そう私に言った。

「由香を好きだった。」

由香を好きでいる俺を忘れたら俺じゃないよ。  
「  
そうもう一度言って、手を離れた。」

「だからさ、結婚してよ。」

「?!」

驚いて顔を上げた私の頬を両手で包んで、

「由香を忘れた最低なやつだけど。  
由香なしじゃ生きていけないみたい。  
…だからさ、結婚してよ。」

記憶喪失でも思い出すぐらい由香が愛してるみたいだし??と笑う  
竜也に、

「まあ、竜也には私しか居ないもんね!!」と返した私はほんと愛情表現が下手だ。

それでもきつとこの人はその奥の気持ちを分かったくれる。  
それは指に光る指輪より確かなこと。

その後、思い出した経緯を聞いた。

「で???どんな写真だったの??」

「えっ、言わなきゃダメ??」

「やらしい写真じゃないよね?!」

「…」

「ちよつと?!」

「…寝顔だよ。」

「…?!変態!!没収するから出して!!」

「嫌だ!!」

「ちよつと竜也っ!!」

でも、結局没収しなかった。

だって思い出すきつかけだもんね。  
写真さんありがとうね。



## 眼鏡と不良？

私は俗に言う”陰キヤ”だ。

陰キヤは陰口の上等文句だし、  
でしゃばるとすぐに”陰キヤの癖に”と言われる。

でも、陽キヤと陰キヤの違いなんて  
誰が決めてどう分かれてるわけ？？顔？？  
陰キヤだつて友達の前では陽キヤみたいに  
話すし、笑う。

それにしても周りを気にして陰キヤと仲良くしたがらない  
陽キヤの人達は可哀想ね。

一握りの人しか友達になれないんだから。

――なんて言つたつてなにも変わらないけど。

とりあえず私は陰キヤで眼鏡でブサイク。  
でも、夢見たつていいでしょ??

”オウジサマ”がいつかやってくるつて、  
私だけを愛してくれる素敵な人がやってくるつて。

「おい、榊真穂。」

友達との喋りながらの昼食中。

そう呼ばれて扉の方へ視線を送ると

オウジ  
桜路サマこと、

桜路雅人が立っていた。

この人は不良で有名(???)で、

何よりかつこ良くて、女子にモテまくり。  
たけど女嫌いらしい。

…それが私を呼んでる?!

ナイナイ。

しかも、このクラスには榊麻由って言う可愛い子が居たはずだ。

(あーお菓子食べよ。)

と思って鞆を持ち上げたとき、

「無視すんなこのやろう。」と言って

桜路が私の腕を掴んで歩き出した。

いやいやいやいやいやー

人の視線に目を伏せながら、

”人違い!!”ですけど?!

しかも女嫌いですよね?!

一人心の中でツツコミを数回繰り返して着いたのは屋上。

「ちょっと待って!!人違い人違い!!」

ボツコボコにされそうな予感がするっ!!

と半泣き状態で叫ぶ。

「は???お前榊真穂だろ??」

「そうですけど、私何もしてない!!」

榊麻由って子の間違いじゃないですか?!!」

必死も必死。

こっちは平和に生きてきたんだよ!!  
何かあるわけもないだろ?!泣

「いや、お前だけど。」

「えーっ」

死刑判決決定。

アーメン。

ここは土下座か?!と思い、  
座ろうとしたとき。

「おい、お前。」

「俺と付き合え。」

「...what??」

月会え??突きあえ??憑きあえ??付き合え??

「あつ、ああ!!はいはい!!どこへ行きましょうか?!」

「いいんだな??」

「はいっ!!なんなりと!!」

「だったら俺を雅人って呼べ。」

「はあ...??雅人様」

「様はいらねー。」彼女”なのにおかしいだろ。」

( ^ - ^ ; ; ? ?

「…もう一度お願いします。」

「は??彼女なのにおかしいだろってんだよ。」

「何が」

「様づけ」

「誰が」

「は??」

「彼女って誰??」

「お前。」

「…付き合えってそっち?!」

「は??」

両手を急いで地面に付ける。

「申し訳ありません。意味を取り違えてましたっ!!」

「何でも奢ります!!何でもします!!」

彼女だけは…」

「知らねえ。取り消し不可」

ガン

「そんなあ……」

その後半泣きで説得したけど…

無理でした。泣

「おい、真穂行くぞ。」

強制連行。拒否権なし。

毎日昼ご飯と一緒に食べるという拷問。  
廊下での周りからの視線（とくに女子）。  
今絶対死ねる…

「どうして私なのよ……」  
バカらしくて敬語もやめた。

「秘密」

そういいながら私の卵焼きを勝手に食べた。  
この人はいつもパン。  
一回弁当作ろうかと思ったけど  
それこそ彼女みたいでやめた。

「女嫌いじゃないの??」

「お前以外はな。」

全然嬉しくねーよ。

逆に私だけが嫌いの方が嬉しいんですけど?!

「どうして嫌なんだよ。」

「…陽キヤがうるさくなるでしょ。」

陰キヤは陰キヤで平和に波をたてず生きたいのよ」

そう、陰キヤって言い訳にも使えるよね。

大体は自分が陰キヤだと思ってもないみたいだけど。

「陽キヤ陰キヤなんて誰が決めたよ。」

「知らない。」

そう言ってお弁当をなおそうと  
鞆の中の物を全部出していく。

「なんだこれ??」

「何って小説。恋愛小説」

「本なんて面白い??」

「この本は主人公が好きになる男の子  
超タイプで超格好いいの!!」

「…どんなやつなんだよ。」

「格好良くて、運動神経抜群、秀才、強引だけど優しく、自分を分かってくれて、いつも守ってくれる人」

「ふんっ。現実そんなやつ居ないだろ。」

「だから良いんじゃない。」

絶対現実にはそんな人私の前に現れないから。」

そう言いながら立ち上がってスカートをはらい、フェンスの方へ向かう。

「そう、現れないから、夢見てるだけ。」

そう呟いた私の声はきくと聞こえてない。

## 眼鏡と不良？

「頭いた〜」

一緒にご飯を食べるといふ拷問から解放された私はフラフラと頭に手をやりながら廊下を前もよく見ず歩いていた。

ドンっ

かどで人にぶつかった。

結構な衝撃に片方から崩れ落ちしりもちをついた。

「うわぁ！！ゴメン大丈夫？？」

と謝ってくれる男の子に大丈夫！！こっちこそゴメンね。と、とりあえず笑顔で返事をした。

手探りで眼鏡を探す。

ボンヤリとしか見えなくて時間はかかったけどようやく見つけた眼鏡は折れてつけれなかった。だけど当たった人を見るために目にあてた。

私と目があった途端どもりながらもう一度謝って走ってどこかに行ってしまった。

それを不思議に思いながら壊れた眼鏡をブレザーのポケットにしまつて教室へ向かった。

人がよけて行く。

それに気づかず私は自分の席に着くと



斜め後ろに居るだろう智恵ちゃんに「智恵ちゃん次なんの授業だ  
つけ??」と聞いた。

「  
…」

「  
…」

「智恵ちゃん??」

返事の遅さに疑問を持った私はブレザーから眼鏡を取り出して、  
前のように目にあてて周りを見た。

「?!」「?!」「?!」「?!」

「?!」

何故か私の周りに人が集まっ  
ていて  
一様に驚いた顔をして私を見てる。

「ま…ほちゃ…ん??」

「智恵ちゃん!!なにこれ??」

自分の席にいつも通り座っていた智恵ちゃんを見つけた私はそう聞  
いたけど、

智恵ちゃん自体もボケッとして返事をしてくれなかった。

その時鳴ったチャイムでみんなが覚醒してどこかへ行ってしまった  
けど、

その日はなにか違う視線を感じた。

放課後

私は同じクラスの一番格好いいと言われてる男子に声をかけられた。疑問を感じながら会話を進め終わるとまた違う男子が声をかけてきた。

それが終わったかと思うと次はギャルが私を囲ってきたのでそれは言い訳をつけて逃げてきた。

（なんなのよ…）

いつもの違いに気持ち悪くなった私は友達を捕まえて問いただした。

「だって、真穂ちゃん眼鏡取ったらすごい可愛いからビックリしたよ！ー！」

といった友達になんだか呆然としてしまった。眼鏡を取った自分の顔は腐るほど見ていたけど他人には見せたことがなかったかもしれない…

そう思いながらの帰り道。

結局人は”顔”なわけ？！と怒りが沸いてきた。

性格が変わってなくても顔が変わったら人の態度が変わる。

「そんなに可愛くないわよ！ー！」

鏡の前の私に怒鳴る。

…あの男がいきなりあんなのもやっとなかった。

「結局人の顔なのね…」

私は鏡の自分を睨み付け拳にぐっと握りしめた。

眼鏡と不良？

ざわめく教室

他のクラスからの野次馬。

先輩や後輩関係なくある教室に集まっていた。

2 - Aは朝からずっとこの調子だった。

それもそのはず。

昨日までブサイクで気にもとめてなかった女の子が見違える程可愛くなってたのだから。

その噂の張本人は視線に気付かないふりをして本を読んでいた。

（最ッ低）

眼鏡を修理しているという理由とつけずに行ったらどうなるかと思  
ってやってきたが、  
180°変わった周りの反応に気分が悪かった。

「のけ。なんでこんなに人が多いんだよ。

ツチ！！おい、真穂行くぞ！！」

いつものお昼のお呼びだしが聞こえた。

「はあ」

ため息だけをついて俺様野郎の前に立つ。

「おい！！真穂どこにいったよ！！早く来い！！」

ともう一度俺様野郎は吠えた。

「あんたどこに目があんのよ！！目の前に居るでしよつが！！」

「…は???お前誰だ。俺が呼んでんのは榊真穂だよ。」

「その榊真穂ですけど。」

「は???」

「だから私が榊真穂！！」

目を見開いて俺様野郎は私を凝視する。

上から下を舐めるように見て最後もう一度私の顔を見て、  
自分のおでこに手を当てて俺熱上がってきたわと一人呟いて出て行った。

「?!」

あまりの行動に止まったままの私に周りの男子が誘ってきたけど私は無視して屋上で一人で食べに出て行った。

（なにあの態度!!）

ムシヤクシヤしてウインナーに箸を刺して考える。

（顔じゃなかったの?!）

謎は解けない。

そしてその後2日俺様野郎は私を呼ぶことはなかった。

イライラしながら帰ること3日目。

あまりに来ないから呼びに行こうかと思っただけどなんだか自分が待

つてるみたいで止めておいた。

そんな今日はちょっと帰りが遅くて道が暗くて怖いと思っていた。

「お姉ちゃん一人??」とよく聞く定番のナンパの一言が私の耳に聞こえたとき、

（やっぱり…）と内心ため息をついた。

すいません。彼氏と待ち合わせしてるで、と言いながら通り抜けようとしたけど、

やっぱり無理だった。

掴まれた腕をおもいつき振り払ったのが癢に触ったのか、

もう一度掴まれて薄暗い路地に連れ込まれて

両手を両手で拘束されて首筋に男の唇が触れそうになったとき。

ドスツと横から音がして男が倒れた。

勿論掴まれていた私も倒れそうになったとき、

私のお腹に腕が回って後ろから抱き寄せられた。

「俺のだったの」

そう聞こえたときやっと自分が声が出ないことに気が付いた。

逃げていく男を見て力が抜けていく。

「大丈夫か??」

座り込んだ私の前へ回ってきて顔を覗き込んでそう聞いたのが後だったか先だったか。

私は抱きついていた。

「ちよっ!!」

私に抱きつかれてしりもちをついた俺様野郎は驚いたように声をあげたけど、

最後は私を抱きしめてくれた。

「2日もどうして来なかったのよ!!」とグズリながら言った私に、風邪で学校休んでたんだよ。それを知らせる方法もなかったしな。といつかメアド交換を拒否したことの嫌みを交えながら言った。

「何?? カウントしてたわけ??」とやけに嬉しそうだったから、まずくて顔を逸らした時、

首筋に唇が触れた。

「ちよっ!!」

急いで離れる私の真っ赤な顔を真っ直ぐ見て  
どうして眼鏡してねえの??と聞く。

修理に出して取りに行つてないだけっ!!といいながら  
おしりで後退してる私の両手を捕まえて次は近寄ってきた…

眼鏡と不良？（後書き）

ちよつと区切ります（＾－＾；



眼鏡と不良？

一気に近くなった顔。

「眼鏡返ってきたら学校に絶対付けてくること」

ギョツと目をつぶっていた私はそう聞こえて目を開けるとまだ至近距離で見つめられていた。

「返事は??」

そう聞かれてコクコクと頭を縦に振って離れようとした。

…そう、したけど後頭部を掬うように持たれたと思ったら唇がついていた。

(何がって…聞かないで泣)

自分より熱い唇。

制止の声も抵抗もあつてないようなもの。

なんかのハリウッド映画ばりのキス。

(いや、まじ食われるかと思つたよ…汗)

くったつとあいつの肩にもたれかかった私の首筋を唇でスツとなぞる。

「ちよっ…すとおつぷすとおつぷ」

まだもたれかかったままなんとか腕をあげあいつのおでこに手を当

てる。

「ほら…熱あるじゃん…」

顔を覗き込む。

真っ赤な顔に少し潤んだ目

…限界だったらしい。

私の方へ倒れ込んできたっ!!

「ちよっ!!」

勿論抱えきれるはずもなく。

一緒に倒れ込んだ。

「ちよっとお願い!!一回起きて!!」

なんとか起き上がったその脇に自分の腕を差し込んで  
フラフラしながらも歩き始めた。

「ちよっと!!家どこ?」

「…」

「はあ…」

今日は厄日か?!調子乗った罰か?!

半泣きになりながら、

目の前にある自分のマンションへ向かった。



熱？

（こつも押しに弱かったのだろうか…）

ベッドに落としたというほうがいいような感じで私はその熱い体をベッドに寝転がせた。

赤い顔にいつもより元気がなさげにおりた髪の毛が幼く見せている。いつもとは違う印象をうける。

そんな病人を見てときめいている私は変態なのだろうか…

いつもは突っぱねているのに来なかった2日は寂しいというか物足りないというか、

なんだか違うように感じたのは事実だった。

（…キスだって、いや…じゃ…なかったし…）

そう考えて顔が赤くなったのが自分でも分かった。

そう！！この人と違って慣れてないだけ！！そうだ、そうだ！！と言い聞かせていた時、寝返りをうったのを見て病人だったっ！！と、急いで氷や薬を取りに行った。

「ちょっと…薬飲んで。」

と私はベッド腰掛けて揺り起こす。

でも全然起きないのにため息をこぼす。

（明日が土日で良かった…）

そう思いながら頭を膝の上に乗せて口に薬を入れて水を飲ませる。

額を触るとまだ熱くて苦しそうだった。

額のタオルを変えて大分落ち着いて寝ているのを確認してお粥と私のご飯を作る。

（まだ寝てるから起きてからでいいか…）

もう一度ぐっすり寝ているのを確認して  
私はお風呂へ入った。

くくくくくくくくくく

「んっ」

俺が目を覚ますといつもと同じ天井の色が見えた。

寝返りをつつてもう一度布団を鼻まで持つてくるといつもとは違う匂いがした。

ズルツと額から何かがずれ落ちた。

「??？」

うつすら目を開けて見ると、

何秒かして自分の部屋じゃないことが分かった。

「?!」

とりあえずクラクラする頭を抱えながら、

扉を開けてドライヤーの音が聞こえる扉をノックする。

トントン

「  
…」

トントン

「  
…」

トントン

「  
…」

（一応ノックはした。）

俺は扉を開けて数十秒目の前の物をただ呆然と見て、  
目があつて…扉を閉めた。

「やべえ…」

熱とかとは違う意味の顔の熱さに右手で顔を覆う。

（いや、パジャマ上だけの危うさ＋風呂上がり…やべえ。）  
そんなちゃっかり見てた俺は変態だろうか…

「まじでやべえ…」

もう一度呟いて天を見上げた。

熱？

（ありえないっ！！）

髪の毛も生乾きのままズボンをはき、  
頭をかかえて座り込む。

怒りよりも恥ずかしさが勝って

立ち上がって見た鏡の中の私は真っ赤な顔で、  
どうせなら新しいお気に入りの良かった…と考えてブンブン頭を  
振る。

（普通は怒るところでしょ！！）と自分に言い聞かせて、  
文句を言ってやるうと鼻息荒く扉を開けた。

「ちょっと！！なんで開け…ん…のよ…って大丈夫？！」

開けてすぐ座り込んでいるのを見つけて思わず駆け寄った。  
慌てて両肩に手を当てて揺さぶると赤い顔に虚ろな目で私を見た。

熱上がったんじゃない？！と額に手を当てたら

うわあと言って赤い顔がもっと赤くなって後ろにひっくり返った。

「…ちょっとほんと大丈夫…??」

くくくくくくく

訳分からなさそうに不思議そうに首を傾げるのをチラッと見て顔を  
そらす。

（パジャマ…）

もう泣きそうになりながらどこかに行った足音を聞いて手を目に当ててため息をつく。

突然横から抱きしめられるようになにかが掛けられた。

手を目から外して見ると、

前に真穂が居てタオルケットに付いているボタンをとめてくれて、

「お粥温めるから」

そう笑顔で言ってリビングへ行ってしまった。

また顔が赤くなるのが自分でも分かった。

その後食べたお粥は美味しかったし、シャワーも借りて歯ブラシも借りた。

色違いの歯ブラシが2つ並んだのが同棲みたいでニヤニヤしてしまった。

で、今の状況。

ベッドには俺、その下の床には真穂。

どんなに言おうが風邪が長引いたら困るの一言で片付けられた。

「なあ、真穂変わるって」

「…」

「真穂??」



「はあ…」

寝てしまった人を動かすのもな…

そう考えて止めたけど、

やっぱり真穂の匂いのする布団は精神的にヤバイ。

さっき寝たのもあって悶々と一人考えていた。

夜中、真穂が立ち上がってどこかへ行った。

トイレだったらしくすぐ帰ってきた。

さすがに眠くなってきた俺はもう半寝ぐらいでその音を聞いていた。

すると、横から布団に真穂が入ってきた。

「！！真穂？！」

びっくりして真穂の方へ体を向けると抱き枕のように顔をすり寄せて抱き付いてきた。

（そう言えば抱き枕を抱いて寝てたな…）

そう思い出してため息をついた。



熱？

「ん…」

抱き枕に顔をすり寄せて、  
自分と同じ匂いと自分より温かいぬくもりに二度寝しようともう一度抱き締めなおす。

「ん…」

突然私の上から声がした。

「ん…真穂…」

次は名前付きで。

（声がする…）

「…」

「…」

「…」

（声…）

私はまだ全然開いてない目で上を見る。

（なんか顎がある…）

そう思っ頭を下ろして目を閉じた。

(…。顎…顎?!)

一気に覚醒した頭でもう一度上を見た。

まるで私の額にキスするような角度と距離。

…あいつが私を抱きしめて寝ていた。

私は状況について行けず、

「・・・」 たつぷり三秒止まって絡めていた足と抱きしめていた腕をほどいて、

目の前の胸を押して距離を取った。

「ちちちちちよつと!!」

外れないあいつの腕の中で抜け出そうと身をよじってみただけで出られない。

すると逆にぐいつと抱き寄せられて、目の前にはあいつの鎖骨。

私は慌ててあいつを揺すり起こした。

寝ぼけたままあいつはどうしてこうなったか理由を言った。

そして爆弾を落とす。

「一夜を同じベッドで寝ちゃったね。」

「…?!?!?!そそその言い方は語弊がある!!」

「だってほんとじゃん。」

もう付き合っしかないね。」

「はあ?？」

「だって俺真穂のタイプぴったりだし。」

頭も学年五位以内。体育も出来るし、優しいし。」

「…優しいなんて自分で言わないでしょ。」

「あと、ずっと好きでいることと守ってあげるってのも付けて。」

「?!」

「俺超優良物件じゃん。」

ずっとなんて信じてないわ。そう言っ腕から抜け出そうともう一度もがく。

あいつは暴れる私をいとも簡単に捕え私の頬を包んで俺もっ三年お前に片思いしてる。と顔を真剣に見つめて言った。

「なっ」

強制的に合わされた視線に気まずくて下を向く。

「最近ダチに気づかれて絶対大丈夫だからって太鼓判おされてやっ

と告つたらまさかの拒否だし。」

「…」

「俺あれでもショックだったんだけど。」

「…」

「どうしてくれんの??」

「…っ知らないっ!!」

「真穂、つき合つてよ。」

「…いやだっ!!」

「俺を見て。」

「…」

「俺を見て。」

恐る恐る目線を上げる。

そして私は一番重要なことを聞いた。

「なんで私なの??」

く\*く\*く\*く\*く\*く\*

桜が舞う入学式前。

入学説明会に俺は来ていた。

親から離れた学校を選んで春から一人暮らし、  
家出同然に出てきた俺だから説明は俺が聞かないといけないという  
ことで一人で学校に来ていた。

推薦で入ろうと真っ黒な髪。

ダチも居なければ知り合いも居ない。

だけど噂はまわってるらしく俺に気づいたやつは驚いた顔をして道を  
あけていく。

ちよつと喧嘩が強いだけ。

それだけなのに周りは腫れ物のように扱って、  
顔がちよつと良いからって近づく男と女。

（めんどくせえ…）

やつと終わった説明会。

校門前で大声で慌てて居る女が居た。

「無いっ！！生徒手帳が無いっ！！」

半泣きで探し回る女。

下に目をやると俺の前に生徒手帳が落ちていた。

「おい、これ落ちてたけど」

座り込んだ女がゆっくりと俺の方を向いた。

「…うわあっ！！ありがとっございますっ！！」

涙目で俺を見たその女は満面の笑みに変わった。

ドクン

思えばこれが一目惚れという感覚なのかも知れない。

このあと何年もこの女の姿を目で追うことになるのだから。

く\*く\*く\*く\*く\*

「えーっ!!あの王子様あんだだっ たの?!?!?!」

「王子様??」

「お礼言いたかったから探してたのに見つからなくて…」  
そう言い終わるのが早い手で顔を隠して格好良かったのに…と呟いた。

「…何が言いたいんだよ。」

「あんたは目立ちすぎな上に女子にはモテモテ、そのくせに女嫌い。その女嫌いの好きになった人な私は眼鏡の冴えない子」恰好の攻撃対象。

あー考えたくもないっ!!」

頬にあつた手が離れて解放されたと思つたら

クルッ

手首を掴まれてあいつに覆い被さられるようになった。

「ちよつと?!」



「  
…」

怒った顔で見下ろすあいつに冷や汗が出そうになる。

「  
…なによ??」

「俺はお前が俺を好きか嫌いか聞いてるだけだ。」

「??」

「どうか聞いている。」

「え…」

そう問いつめといて一転笑顔に変わり、  
まあ、俺のこと好きでしょ。と言った。

「は??」

「じゃなきゃ、こんな状況にはならねーよな。」とニヤリと笑う。

「…退いてっ退いてよっ!!」

自分の状況を思い出してもがくと、

急に唇の上に人差し指を置いて私を黙らせた。

「俺は真穂しか好きじゃない。」

周りが何か言うんだっただらずっと一緒に居ても黙らせる。

何も言わせない。」

「っ」

「俺のこと嫌いじゃないでしょ??」

そう言っただけで近づいてくる顔。

私は自然と目を閉じた。

なかなか降ってこないキスに恥ずかしくて目を開けるとあいつは微笑んでまだ目の開いている私に今度はちゃんとキスをした。

「もう俺帰るわ。」

朝ご飯を食べたあいつはそう言った。

「あつ、うん。バイバイ…雅…人くん…」

そう言うのが精一杯で私はすぐ扉を閉じた。

私には難しすぎる…

こんな恋をしたこともなければ、恋人なんて何年前…しかも彼氏…まあ、彼氏はイケメンだし。

でも一応女嫌いだし…浮気は大丈夫かな。

火照る頬を冷やしながらお皿を洗ってたらインターフォンが鳴った。

「はい」

ガチャ

「どちら様ですか」

「よっ」

現れたのは服を着替えたあいだった。

「…あんた早くない??」

「いや、知らなかったんだけど、家隣だったから。」  
そう言っ隣部屋を指差す。

「…」

「真穂??」

「いやー!!」

そう叫んで扉を閉めようとしたけど足を突っ込んで阻止され、その足で扉を開けて入ってきた。

「真穂ちゃん あんたじゃないでしょ??」  
そう楽しそうに私に詰め寄ってくる。

若干どころか超引き気味で逃げ出そうとした腕を掴まれ、またあいつの腕の中。

その後は名前を呼ぶまで出してくれなくてついでに大好きもつけられて出れたのは日が暮れそうな時間だった。

それからあいつとは授業中以外はずっと居て行き・帰りも一緒に友達もその周りもなにも言わなくなった。

あの時の王子様は変わってしまった。

ただずっと待ってた”オウジサマ”が現れた。  
ずっと愛してくれるって言う”桜路様”が。

白馬に乗ってなくてもいい。

優しくなくてもいい。

強い手で私を引っ張って守ってくれたら。

ねえ、いつもは言えないけど。

ずっと愛していてね。

…私も大好きだよ。

そう小声で毎日言いながら、

何故か毎日寝にくるあいつにくるまれて、

寝ているあいつの唇に触れるだけのキスをした。

孤独？

私はその横に並ばない。

私は絶対戻らない。

――私は絶対頼ったりしない。

そう決心した筈なのに……

私は高校に入って学校に行けなくなった。

今まで何も問題のない生徒の一人、少女Aだったのに  
この日を境に七瀬綾という固有名詞に変わり、要注意人物になった。

一番端の一番後ろ。

それは私指定席になり。

いつも集会で後ろに居る子。

それは私を指す言葉になった。

早退も多くなり、

そのたび自分の出来なくなったことを思い

誰も居ない家、分かってくれない家族

一人涙した。

私は一人だった。

友達も上辺だけ、

信じられるのはお金だけ。

って言ってもバイトもしてないからお金は無いけれど。

皆から一歩引いて傷つかないように、  
誰も入れないように、  
バリアを張ったのは私なのに。

――寂しいと思うのは自分勝手だ。

（あぁっ）

急にくる不安。

自分を自分では保っては居られない。  
震える手、回る感覚、息苦しい世界、  
思わず膝に手をつけて自分を支える。  
耐えれず止まった電車から私は出た。

「はぁはぁはぁ」

トイレに急いで駆け込む。  
これが今の私だ。

それは突然やってきた。  
もうこうなって一年、  
最近はまだ安定してたのに  
…どうしてだろう。

私はこれ以来電車に乗れなくなった。  
それでも乗らなければいけない。  
朝は送ってもらっても帰りは特に。

（どうしてこうも嘘がつけないのだろう。）

私はただ”普通”の子になりたかった。

何か飛び出たことがなくていい。

何も誉められることがなくていい。

ただただ”普通”で親に心配もかけず、

弟にだけ注意してられるような存在感がないような安心出来る子に。

多くを望んでなんかいない。

なのにどうしてそれさえも叶わないのだろう。

お母さんからの電話。

ただ一言”大丈夫”とどうして言えないの？

どうして河野のメールで本当のことを言ってしまったの？

――結局私は誰かに心配して欲しいのかも知れない。

河野籐也

高校三年で彼氏だった人。

正直言うつと好きではなかった、

けど押しに弱い私と付き合いえば好きになるんじゃないかという気持ちで付き合った。

結局1ヶ月しか保たなかったけど…

原因は私が正直じゃないからあいつの正直さに慣れなかったからだろう。

そんな私を未だに好きなのだから本当に頭がおかしい。

学校も違い忘れるだろうと思っていたら  
メールがきて、ちよつと返信したら

調子に乗って毎日のようにメールがくる。

気分屋の私だから少々うざいが何気に中学が一緒だった人とメール  
してるのは河野だけだったりする。

――弱った私に声を掛けてくれるのは河野だけ。

そんなところから私はポロツと弱音を言ってしまったのかも知れない。



孤独？

涙の一粒ずつ強くなれたらいいのに。

私達は泣いて泣いて泣き終わって、

やっとムダなことだと分かる。

何一つ強くなってないことに…

なのに…

なのになんで涙は意志ではコントロール出来ないものなのだろう。

なんで自分でコントロール出来ないものばかり自分にあるんだろう。

（もうダメっ）

10分も乗れず私は電車を降りた。

学校からの帰り。

私は降りた駅のホームの冷たい椅子に座って

上を向いて涙を堪える。

季節は変わり吐き出す息が白くなる

冷たい季節。

私を一人にする季節。

堪えられなかった涙がコロリと頬を滑り落ちた。

（河野：）

こんなときだけあいつにすがりつきたくなる。  
私に気づいて降りてくるとか

偶然居ただとか。

どうしてだろう。

こんなとき見つけて欲しいのは河野だけ。

私はズルい女だ。

こんなときだけ河野に電話したくなって、  
こんなときだけ助けて欲しくて。

…いつも突っぱねてるのは私なのに。

涙を拭くけど足は震えて立てそうにない。

助けて…そう言えたら楽なの??

誰かに助けを求めたらいいの??

それで何か誰か助けてくれるの??

私にも昔は友達が居た。

他の子と仲良くしてるのが嫌だったぐらい

私は元々嫉妬深い方だ。

だけど友達にしても恋にしても、

いつからか執着しなくなつた。

まるでそれを忘れたかのように。

そして好きという気持ちも

友達というカテゴリーも小うで忘れた。

「綾って秘密主義者よね。」

そう友達に言われるようになった。

ただ私は何かを言って周りにどう思われるか分からないことが怖くて言わないようになっただけだ。

――だって人も言葉も変わっていくものでしょう??

”絶対”という言葉も信じない。

”頼って”という言葉も信じない。

――それが私を守る方法だから。

孤独？

周りはゆっくりでいいと言っけれど

”何が”私を待ってくれるの？？

”誰か”側に居てくれるの？？

時間も、

単位も、

人も、

自分も、

何も…待つてはくれないじゃない。

――それに気づいたのはいつだっただろう…

相変わらずの毎日。

朝送ってもらう車すら怖くなって、

例の発作が出た。

それは今までよりも強く。

疲れ果てた心と体。

――全てを捨てられたらいいのに。

全てを投げ捨てられたら。

そんな勇気なんてない。

楽しみだった校外学習もバス移動で、

こんな状態の私にはとてもじゃないけど行けなかった。

（この調子じゃあ修学旅行も無理だろうな。）

最近思うこと。

部活も辞めて、

校外学習も行けなくて。

私はみんななどの思い出をどこで残せるのだろうか？？  
この三年間で何が残せるんだろう。

なんとか帰った家の中。

）  
）

テレビから悲しい歌が流れる。

私も歌いながら…何故か私は泣いていた。

怖い。

漠然と、何かが怖く、

そしてとてつもなく寂しい。

それが私の思ってる誰にも言えない  
全てなのかも知れない。

何かに頼らないと決めたのはいつだったか。

それが”永遠”に続くことはない、

幼心に思ったから。

どうせ無くなってしまう物なら、

初めから求めなければ傷つかない。

無駄な期待もせず済む。

”永遠”という言葉信じない。

”永遠”の終わりは明日かも知れないから。

そんな不確かなものは要らない。

なのになんで…

私が求めるものは”ずっと”が付く、

不確かなものばかりなんだろう。

いつだったか。

河野が言ってくれたことがある。

”頼ればいい。”と、

私は笑ってそんなキャラじゃないと言ったら

”キャラとか関係ないよ”って

ー信じていいかな??

ずっと側に居てくれると。

寂しいと言っていいかな??

独り座り込む私に手を差し伸べてくれる??

なんて思うだけ、

臆病な私はきつとその手を取らない。

きつと知らない振りをして顔を伏せたまま

強い腕が欲しい。

私を有言無言せず引つ張る強い腕が、

その腕で私を遠くへ連れてってくれたらいいのに。

どうして生きてるの。

どうして生まれてきたの。

どうして…生きてなきゃいけないの。

どうして朝が来るの。

死ぬ勇気なんてないくせに  
死ねたらいいのに。

――そうできたらどれだけ楽だろう。

私はきつとこう思っ  
て明日も生きていく。  
そして死ねないまま  
一日が終わって、  
そしてまた朝が来  
て絶望するんだろう。

私は独り不幸な悲劇  
のヒロインのように。  
自分が作り出した  
世界なのに、  
自分独りが不幸だ  
と思う可哀想な子だ。

それでも自分では  
掴めない”永遠”  
を思い描いて  
幸せな自分、  
有り得ない現実を  
思い描いて毎日  
眠りにつく。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1727x/>

---

はじまる恋。

2011年11月23日16時54分発行